

今 年1月2、3日。4年ぶりにピンクの襷が箱根の山をつないだー。

「今年の箱根は選手たちが頑張った結果です。たまたまだったと言われたいように、来年はシード権争いに絡みたいですね」と破顔して話すのは、新雅弘監督だ。

着任からちょうど1年が経った5月、文理学部陸上競技場では“箱根駅伝出場効果”か、20人の1年生を含む47人の選手たちが走り込みに集中していた。新監督は高校駅伝の世界で、全国制覇3回、46年連続県代表の岡山・倉敷高校から昨年、請われて母校の大学生たちを教えるために単身、上京した。

「教えていることは高校生たちと同じです」。選手たちと同じ寮に住み、生活面での規律、モラルを毎日徹底して説き続ける“倉敷メソッド”で、結果はすぐに表れた。

昨年10月14日、箱根駅伝予選会で、ケニア留学生で1年生エースのシャドラック・キップケメイがトップでゴールテープを切り、監督の予想をはるかに上回る5位で正月の本選出場を決めた。

監督も選手たちも初めての箱根、3区まで4位と健闘を見せたが、最終的には15位。シード権獲得となる10位以内までは、まだ差があった。

9区を走った中澤星音選手(岩手／一関学院高出身)、10区を任された大仲竜平選手(沖縄・波照間島／北山高出身)は、悔しい思いを経験し、今年、3年生にして主将(中澤選手)と副将(大仲選手)に選ばれた。創部以来、幹部が3年生というのは前代未聞のこと。これも監督の“次の一手”だった。「これまで以上を狙うには、これまでとは違ったことをしないといけない」(新監督)

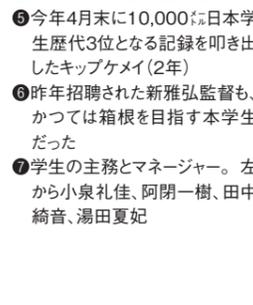
4年生が表に出ずに下支えすることで、3年生ははじめ下級生たちが間違えな意見を言える土壌ができ、次年度につながる好循環が生まれる。それは選手、スタッフたちのモチベーションにもなっているようだ。

中澤主将は、「個人としてはタイムもですが、それ以外の部分でチームの目指す方向性を前向きにしていきたいですね。昨年主将だった下尾悠真さん(現NTN陸上競技部所属)がどういことをやっていたかな、と思い出しながらやっています」と、若くして担った重責を、真っすぐ受け止めている。

今年の箱根本選には出られなかったが、昨年急成長を見せた2年生の天野啓太選手(愛知／岡崎城西高出身)は「(新監督指導の下)コツコツとやってきたことが昨年の後半、結果に出ました」と言う。

「継続は力なり」。新監督が30年以上、近隣近県の中学から上がってきた生徒を育て、倉敷高校の名を全国に轟かせたのも、地道な毎日の積み重ねが全て。そう言い切れるだけの確固とした自信が、北は北海道、南は沖縄・波照間島から集まった選手たちにも伝わり始めている。

名門復活が期待される、特別長距離部門の“ニチダイシンジダイ”。かつての栄光は、きっと継続の先にしかない。



⑤今年4月末に10,000mの日本学生歴代3位となる記録を叩き出したキップケメイ(2年)
⑥昨年招聘された新雅弘監督も、かつては箱根を目指す本学生だった
⑦学生の主務とマネージャー。左から小泉礼佳、阿閉一樹、田中綺音、湯田夏妃



注目選手

天下の険・箱根5区を疾走！ 狙うは2年連続出場 大橋 優(4年)

昨年3年生で初めて箱根駅伝予選会メンバーに選ばれ、見事に本選出場を手にした。箱根駅伝に「やっと出られた」という思いと「次は勝ちたい」という、その両方の感情に襲われた。

小学校時代から冬の持久走では学内で一番。その頃から長距離は得意だった。中学でその得意を生かそうと陸上部に入部。メキメキと頭角を現し、複数の高校



から声を掛けてもらい、通える範囲、全国を狙えるところでやりたい、という思いで大垣日大高校に進学。思うような成績は残せなかったが、本学で駅伝を続けることを決めた。ところが、いきなり故障に泣いた。2年生になって、最も軽い練習メニューを何とかこなせるようになったところから、昨年はようやく練習での成長を体感した1年だった。

来年は就職。将来の職業で選んだのは、警察官。「『犯人を追いかけるのは速そう』って皆に言われます(笑)」。大学生活のラストイヤー。目指すは、もちろん、2年連続箱根本選出場だ。





競技部紹介

NU Scope



陸上競技部
(特別長距離部門)

“倉敷メソッド”で幕を開けたニチダイシンジダイ

1921(大正10)年に創部した陸上競技部にあって、「特別長距離部門」という、まさに“特別”な名称を持つ部門は、箱根駅伝で12度の優勝を果たしてきた名門だ。今年、4年ぶりに“箱根”に再び咲いた同部門は、今、転換期を迎えている。